

随 想

余暇点描

高田 健三

昨年の初夏のある日、急に思い立って家内と鈴鹿の御在所岳に登った。登るといっても、かつて若かりし頃、裏山道の急峻を2時間もかけて登ったのとは異なって、ロープウェイのわずか10数分で、千メートル級の頂上についてしまう今日では、山の上といった実感に乏しい。しかも驚いたことに、名古屋市内から高速道路にのり、東名阪道路を通過して来ると、八事の我が家から何と1時間半で頂上に着いてしまったのである。それかあらぬか山上周辺は遊園地の雰囲気、賑わっている人達の中にはヒールの高い靴をはいている女の人の姿さえちらほら目にとまった。夏の季節ということもあって、「山頂牧場」に飼われている天然記念物のカモシカは、毛がぼろぼろに抜け落ち、痩せこけていて、恰も人間の自然社会に対する侵害の見本のようにも見えた。大勢いた観光客も哀れなカモシカに同情する風情もなく、「かわいそう、かわいそう」と言う家内の声を聞きながら、再びロープウェイで山頂を後にした。麓に下りてきて、どの道順でと帰路を選ぶため地図を広げたところ、鈴鹿スカイラインと名付けられた裏街道を通過して、国道1号線の山中町に抜ける道のあることに気がついた。実はこの日の小旅行は、年甲斐もなく6月に手にしたスポーツカーの性能テスト(?)を兼ねたドライブ行であったが、三十数年前に家内とドライブした鈴鹿峠のことが思い出されてこの道をとることに決めた。

四日市～菰野を通る道に比べ交通量はまばらで、見事に九十九(つづら)折りになったこの山路は、予想以上に快適であった。これは正解だったなどと独り合点をしていたところ、思わず目を見張る光景がフロントグラスを通して広がって来たのである。それは正に満開の花をつけた合歡(ねむ)の並木であった。一輪一輪は淡紅色を滲ませた水鳥の羽毛のような繊細な花である。高橋 治によれば物憂くも優な美女の趣があるという。芭蕉はこの花を、呉の国の伝説の美女、西施になぞらえて詠んでさえいる。その花が長く伸びたたおやかな枝の先を被つて群がって咲く様は、ふわふわの綿菓子か幾重にも重なって浮いているようにも見えて、私はメルヘンな気持ちに引き込まれていた。道は急な下り坂のた

め、景色はすべて足もとから浮き上るように展開する。斯くして、つづら折れを180°ターンする度に、次つぎに湧き出るように現れる合歓の花の優雅な饗宴は暫くつづいた。桃源郷とはこんな風景の谷の奥に長閑(夏かに広がる仙境のことをいうのだろうか)と思えた。

九十九(ツツラ)折る 山路(ミチ)もかすむや 合歓の花

本来は山野や川辺に自生するまめ科の木であるが、このように道沿いに茂っているのは、植えられたものもあるのだろうか。いずれにしても、全国あちらこちらに桜並木の名所はあれど、これほどの合歓の並木は寡聞にして知らない。桜と時季を異にして山野を彩ってくれるとは心憎い限りである。

あれこれ楽しみながら山を下り目指す山中町で1号線に合流した。すると、そこには巾広の片側二車線の立派な国道がゆるやかなカーブを画いて走っているのではないか。対面通行であった昔の道の面影はどこにもなかった。三十余年の月日の落差を、コーヒーショップの窓越しに、暫し眺めたことである。案の定、かつての難所の鈴鹿の峠も知らぬ間に過ぎてしまった。坂は照る照る鈴鹿は曇る、あいの山中雨が降ると歌われた旅情は今では味わうべくもない。おかげで予定よりも早く帰宅することとあいなつた。残暑の頃、庭の手入れに来てくれていた庭師の親方に、ふと思い出して鈴鹿の合歓の花のことを話したところ、即座に「あそこは知る人ぞ知る合歓の木街道ですよ」という返事が帰って来た。庭木専門と思っていた人が、山間の自然を知ってくれたことが、なぜか嬉しかった。実は我が家の庭にも一株あって、丹精しているつもりが、思うように育ってくれない。それでも夏のひと時、庭の隅を彩ってくれる。この花は密集して咲き、紅色にきれいに見えるのは長く伸びた沢山のおしべであって、花びらそのものは小さくて目立たない。昼間、一杯に開いている羽状複葉は、夕暮れともなると精巧に畳み込まれて眠ったような様子を呈する。そこにその日その日のけじめをつけて精一杯生きている感じがして私は好きである。いつの日か鈴鹿のような大木に育てて、合歓の木屋敷などと呼ばれてみたいと思っている。

夏も過ぎ、朝晩やっとな秋の気配が感じられ始めた9月の末、親子三人で久しぶりの北陸路の旅をした。その日はあいにく、名神高速道路では、養老附近での事故のため道路閉鎖を喰うやら、伊吹山麓を迂回する365号線を抜けてやっとな琵琶湖東岸の長浜で北陸自動車道に乗れたと思ったら、朝からあやしかつ

た空模様が雨に変わり、急に雨足が強くなった。ひそかに楽しみにしていた愛車の高速クルージングも出来なくて、この日は欲求不満が残ってしまった。幸いにも、永平寺に着くころには小降りになり、昔学生の頃ある教授に張り子の虎といわれた程に雨の嫌いな私も、少しほっとした気持ちになった。特別に信心深いわけではないが、お参りに訪れた目的は杉木立に七堂伽藍という自然と人工の調和を見ることであつた。さすがに禅宗の本山だけあつて、雨に煙る杉の木立、その間に見え隠れする伽藍のたたずまいは、堂々としていて時に威圧的でさえあつた。その中で、堂の周辺の庭の苔が雨に打たれて余計に青くしっとりしているのが極めて対照的な情景に映つた。観光化の進んだ近頃の神社仏閣の雰囲気は、ここも例外ではあり得ず、或る種の喧噪が漂っていた。そんな中、見学者の列の合間に、時折、堂から堂への廊下を渡る修行僧の姿が、世俗の煩悩から、かろうじて一線を画しているようであつた。

秋雨に 煙る回廊 僧の行く

見学者は総て一旦入口脇の大部屋に案内され、そこで寺の故事来歴についての説明を聞くことになっている。終わりの方で、見学中、何何をしてはいけません。何何すると退場して頂くこともありますといった注意事項があつた。そこにはトップダウン的管理社会の空気を感じたが、それも修行場としての厳しい戒律のなせる業なのだろうか。

夕暮れも近づいて来たので、この日の宿をとってある山中温泉に向かうことにした。京福鉄道の分岐点、永平寺町より364号線に入り、福井と石川の県境にある大内峠を越すと、下り急坂のワインディング道路となり、道巾も狭く、期せずしてドライブテクニックを満喫することが出来た。下りの途中で道は大聖寺川の上流と出会い、そのまま川筋に沿って山中温泉へとくだる。幸いに明るいうちに宿に入ることが出来た。この地は芭蕉が桃源郷に譬えるほど気に入った出湯と伝えられている。元禄2年(1689)の3月27日(太陽歴5月16日)、江戸を發つた「奥の細道」の大旅行も、終りに近づいた7月27日に山中に足を踏み入れたその時、この山間(やまあい)の湯の煙は疲れのたまつた身を癒すのに格好であつたのだろう。今日でもホテルや旅館が大聖寺川縁に清流を見下す様に点在する落ちついた温泉郷である。

部屋に案内されて、ふと溪流に面した窓辺を見ると、真っ先に風に揺れる合歓の花が目に入った。夏の花が今頃と一瞬目を疑つたが、まぎれもなく合歓の

花であった。女中さんに聞くと、時季には川筋に結構咲くとのことであったが、その名残りの花なのであろう。咲きかたも盛りとは異なって色も褪せ気味であったが、川向いの崖の緑を背景にして霧雨に打たれる様には、なお美女の風情を残していた。雨にも似合う花なのである。

暮れなずむ 谷のあかりや 合歡の花

溪流を見晴らせる広びろとした浴室で、久し振りの旅の気分を味わって部屋に戻ると、相前後して家内と娘も湯から戻って来た。そしてしきりにここの温泉は広びろとしてよかったという。彼女らによれば、一般に温泉地のホテルや旅館の案内にある大展望風呂とか豪華大理石風呂とかいう宣伝は、その殆どが男性向けで、女性用は常に劣るものらしい。そのままを信ずればこの世界ではまだ男性中心主義が主流のようである。夕食の支度をしに来た女中さんにそのことを話すと、「皆さんそう云って喜んで頂けます。実は以前、常陸宮妃華子さんがお泊まりの折に改装したので……」という返事であった。ああそうなのだ、二人とも納得の様子。同様なことは、北海道は層雲峡のホテルでも経験したことがあり、ロイヤルファミリーも思わぬところで我われ庶民を喜ばせるものを残してくれるものである。

あくる朝は、昨日の雨に洗われて、高く澄んだ青空であった。そこにうろこ雲が浮いているのはやはり秋の季節なのだろう。この日は那谷寺（なただら）が目的であったので、ゆっくりの宿立ちにした。山代温泉から栗津温泉へ抜ける裏道をとって暫くするとすぐに那谷寺の案内が目に入った。この寺は花山法皇が、西国三十三ヶ所の霊場巡りを終えてこの地を訪ねられた時に始まるという。奇岩に松の自然の造形に霊験を感じて開基されたと伝えられるこの寺の名前は、三十三ヶ所最初と最後の那智山と谷汲山の頭の二文字をとって名づけられたと案内書に記してあった。ここに詣でると三十三ヶ所参りをすませたと同じご利益があると聞く。真偽のほどは知らないが信仰にも結構便法があると思う一方で、信心深くとも体の弱い人には誠に有難いお寺というべきである。山門に入って木陰の石畳を暫く進むうち、急に目の前がひらける。ふと左手前に目をやった時、「ああこれだっ」と思わず声に出た。そこには風雪に曝された灰白色の岩山に古松を配した清閑なたたずまいがあった。紛れもなく、「石山の石より白し……」と詠んだ芭蕉の心象風景の世界なのである。永年心にあったその地に立って、芭蕉が足を止めて眺めたのはどの辺だろうかと思うだけでも、

ある種のと きめきを 禁じ得なかつた。

秋空や 年古る石の なお白し

ここぞとばかり家内と娘に芭蕉との係わりについて講釈に及んだことである。それにしても今を遡る千年の昔、花山法皇の目に映った原風景とはどのようなものであつただろうか。当時はもっとあらたかであつたに違いない。しばしその地に佇むうち、私は何故か心とむ思いに満たされた。岩山に懸かるお堂の堂守りの人が、ここの紅葉はすばらしいですよと話してくれた。気がついて見ると、周囲は楓と満天星（どうだんつつじ）の濃い茂みではないか。秋の頃この風景は、恐らく私の想像を遥かに越えるものであろう。再び訪れる口実が出来たと思つた。

後になって知つたことだが、芭蕉は山中を發つて次にここを訪ねていた。期せずして我われも同じ道筋を辿つたのである。那谷寺を出て、芭蕉が立ち寄つた大聖寺の街を横目に見て、加賀インターから北陸自動車道に乗つた。天気晴朗、車の調子も上々で、帰路は勿論、高速クルージングを楽しんだ。

旅の後、数日して、先々で撮つたスナップ写真が出来上がつて来た。それぞれまあまあ出来であつたが、那谷寺の石山の白さの色合いが、私の網膜の残像と異なつてかなりくすんでいるのが気に入らなかつた。カメラの目と私の目とどちらが正しいかと問えば、人は皆、カメラを指すに違いない。しかし、それも私の網膜を通した石山の心象が、一步、芭蕉の意識の世界に近づいたせいなのだろう、と窺かに独りよがりに浸つたことである。

(同朋大学教授・名古屋大学名誉教授)